

# 中国訪問記

藤田至則\*

## Report of visit to China, 1984

by

Yukinori FUJITA

### 訪中の目的

1983年3月に、北大の故湊正雄教授らとともに、当時、中国地質学会理事長の黄汲清教授と同院の任紀舜副研究員を日本に招待申しあげ、その折一行が本研究センターにもたちよられたことは周知である。同年9月～11月にかけて、筆者が日本学術振興会を通して、中国科学院長沙大地構造研究所長（中国地質学会副理事長）の陳国達教授を日本に招待申し上げた。この両者の通訳として来日されたのが、山東省青島にある山東海洋学院の構造地質部の王徳文教授であった。

じつは、王教授と筆者は、1977年ごろから文通を進めてきた間柄である。文通のきっかけは次の通りである。筆者が1973年に執筆した「日本列島の成立」（築地書館）に、さきの陳所長の「地窪説」が、

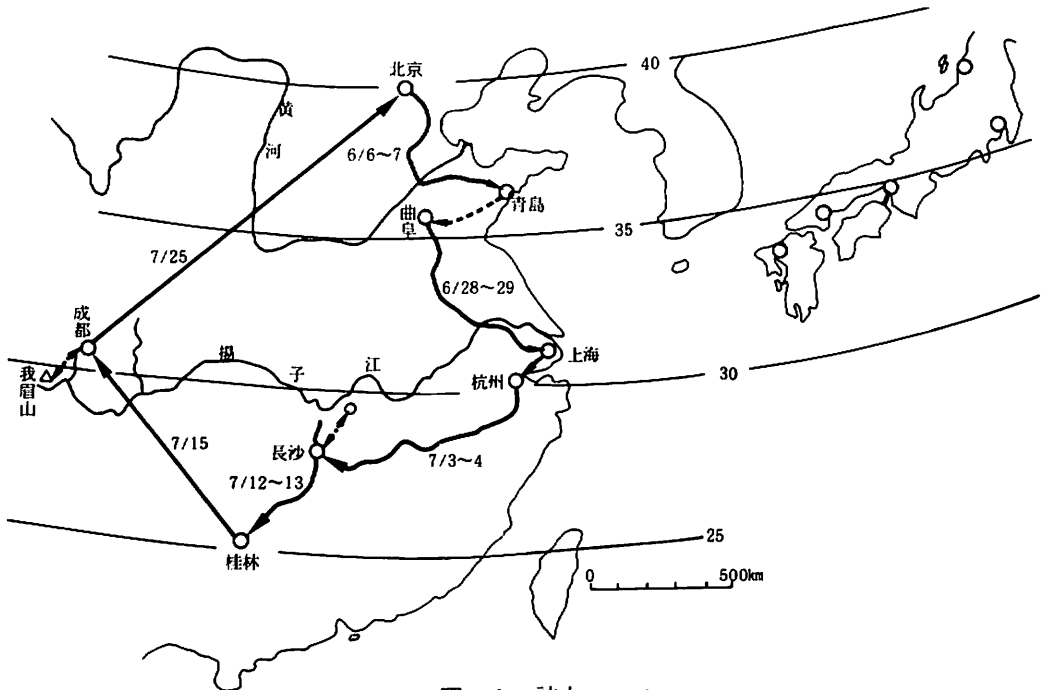


図-1 訪中コース

曲線矢印：特急列車コース（上海-杭州以外はすべて夜行），  
直線矢印：航空コース，破線：自動車コース，日本からの訪中  
コースは往復とも成田↔北京であった。

\* 新潟大学積雪地域災害研究センター

筆者の陥没説と共通した内容を含むとのべていたことを王教授が知り、王―藤田―陳の三角関係を実現させたいと、日本語に堪能な王教授が仲介の労をとられたというわけである。王教授も、筆者と同じく極東の大構造の研究というテーマをもたれており、お互の主張も共通する点が多かったためかその後の交流はスムーズにいった。

さて、こんな関係から、筆者の訪中計画は、上記の王教授によって構想され、次のようなきっかけをつくって下さった。

まず、山東海洋学院（教育部―日本の文部省―一系統）より、6月5日～30日の予定で、国内旅費と滞在費を用意するから、講義と地質見学のため訪中してほしいとの申出があった。

これと別に、さきの中国科学院長沙大地構造研究所の陳国達所長から、7月1日から14日までの予定で、国内旅費と滞在費を用意するから、講義と地質見学のため招待するとの申出があった。同時に、日本から中国までの往復旅費は中国科学院と日本学術振興会の協定により、日本の学振から支給することになるとの知らせもあった。このことは、王教授と陳所長の打合せの結果講じられた処置であった。

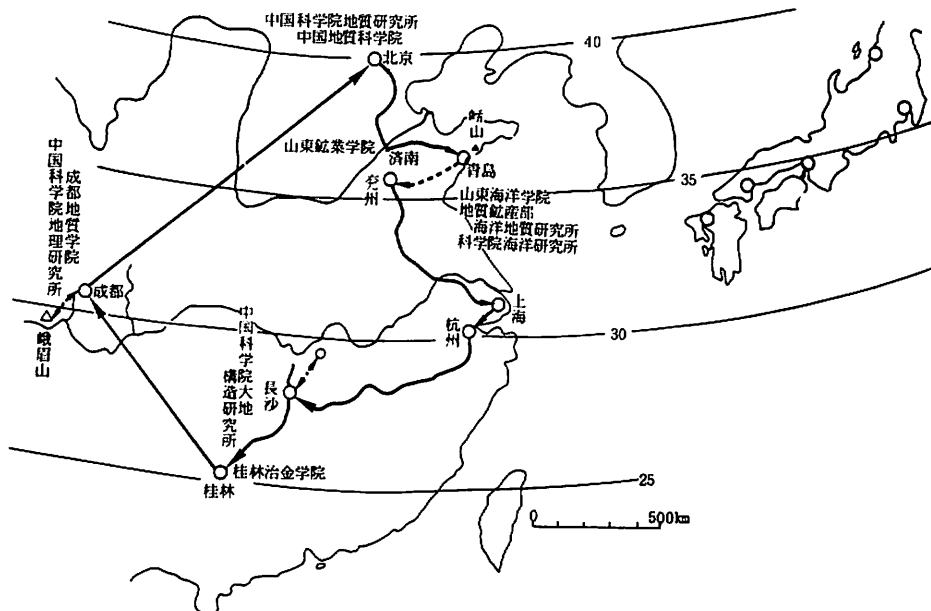


図-2 訪問した主な研究機関―山東鉱業学院だけは面接―



写真-1 6月10日、青島市魯迅公園にて  
左：山東海洋学院の王徳文教授



写真-2 7月5日、長沙市の市民劇場での講演会にて  
右側が当時の大地構造研究所長陳国達教授

また、四川省の成都地質学院（鈹産部—日本の通産省のようなところ—系統）の張倬元院長（災害科学専攻）から、7月16日より25日にわたり、国内旅費と滞在費を用意するから講義と地質見学のため招待したいとの手紙がとどいた。ちなみに張院長の招待はかねてからの竜学明講師の働きかけによるものであった。同講師は1983年～84年に新潟大学理学部地鈹教室に留学された方である。

さらに、渡航直前に、さきの中国地質科学院（鈹産部系統）の黄汲清教授（1984年に院長をやめられ名誉院長になられた）から、7月26日から31日まで、国内旅費と滞在費をもつから、講義と見学にきてほしいとの申出をうけた。私の訪中計画を王教授から伝えきいての処置であった。

このほか、6月6日、北京の、中国科学院地質研究所で2時間の講義、6月28日、曲阜（孔子の遺跡のある地方都市）で、山東省泰安市にある山東鈹業学院（鈹産部系統）の田景瑞院長と2人の教授の訪問を受け、学术交流についての懇談会をもった。また、7月15日、広西壮族自治区の桂林市にある桂林冶金学院（鈹山部系統）で2時間程の講義を行った。また、7月19日、成都市にある中国科学院成都地理研究所（山地・地すべり・土石流の研究所）を訪問し、院長ほか10数名と座談会をひらいてもらった。



写真-3 7月31日帰国直前、北京の民族飯店前にて  
中央：中国地質科学院名誉院長黄汲清教授  
左：任紀舜中国地質科学院副研究員（中国地質学会構造地質委员会主任）



写真-4 陳国達教授（前列左から2人目、当時、大地構造研究所長）を囲んで  
前列左側：黄甦教授（現大地構造研究所長）  
後列左：竜漢春助教授・後列右：張廷光助教授



写真-5 桂林市にて  
背後の鋸歯状山容が特色（写真-17参照）  
左側が山東海洋学院の王徳文教授、右側が成都地質学院の竜学明講師、2人とも通訳の労をとって下さった。



写真-6 北京の北海公園、仿膳飯店（清国宮廷料理で有名、黄教授の招待レセプション）  
右：中国科学院地質研究所の常子文助教授  
左：地質科学院外事処の梁榮成氏、ともに通訳としてお世話になった。

6月5日～8日、北京での通訳は、地質研究所の常子文助教授（10数年前、東京教育大学で2年程いっしょだった）と地質科学院外事処の梁栄成氏（1983年、黄教授とともに来新された）がつとめてくれた。6月9日から7月15日までは、終始、山東海洋学院の王徳文教授が通訳をつとめて下さった。7月16日から24日までは成都地質学院の竜学明講師が通訳をつとめて下さった。7月26日から31日までは、6月の北京と同様前記の2人の方に通訳していただいた。

### 講演と座談会

主な講演は、青島の山東海洋学院、長沙の大地構造研究所、成都の地質学院、北京の地質科学院で行った。海洋学院では、9回の講義と2回の座談会をした。対象者は、全国から集った地質関係の大学教官、研究所や国家・地方自治体の技術者、鉱産関係技術者など約70名、災害の話はほとんどしなかった。

長沙大地構造研究所では、講義7回、座談会1回を行った。対象者はやはり、人は変わったが上記と似たような構成で約85名であった。ここでは、長沙市の劇場の一室で行った。災害の話はしなかった。

成都地質学院では、講演6回、座談会1回を行った。対象者は上記の2回とちがって、ほとんどが四川省内とくに成都市の研究機関の人たちであった。約60名程度。地すべりの話を1回行った。

北京の地質科学院では講演4回、座談会を1回ひらいた。地すべり・土石流の話を1回行った。対象者は、地質科学院や若干の他の研究所の人たちで、約40名位であった。

どこでも学生はほとんど含まれず、院生がそれぞれ5～6名程度出席した。

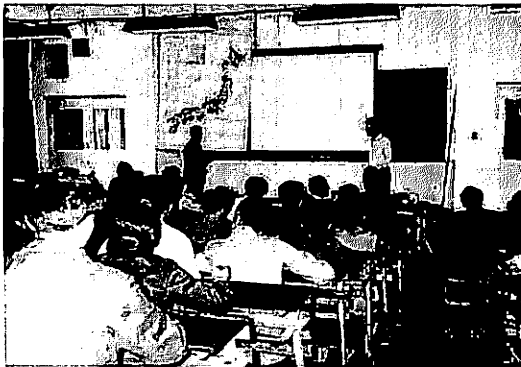


写真-7 山東海洋学院での講義風景



写真-8 長沙市の市民劇場での講演受講風景



写真-9 成都地質学院の講演会の受講風景

## 災害に関わる問題

6月6日に中国科学院地質研究所で講演したあと、新僑飯店で、王副所長らがレセプションをひらいて下さったが、たまたま副所長が土質力学関係の専門家であった関係から、黄河流域の地すべりで共同研究をしないかとさそわれ、後日の相談を約束した。

成都地質学院では、やはり所長の張倬元教授が地すべりの専門家でもあり、また、学院には水文工程地質学部というのがあって、災害科学の専門家が約8名ほどおられる(写真-10)。それらの方々と、黄河と揚子江のへりに生じた地すべりのスライドをみながら交流することができた。院長から、中国において共同研究をすることの申出をうけた。

なお、成都市には、地すべりや土石流の研究を主とする中国科学院成都地理研究所があり、数時間にわたり訪問し、地すべりの研究者10数名と座談会をひらいた。ここでは時間も少なく交流の話はでなかったが、交流するには相手があまりに大世帯すぎる感じもしたのであえてこちらから切りださなかった。

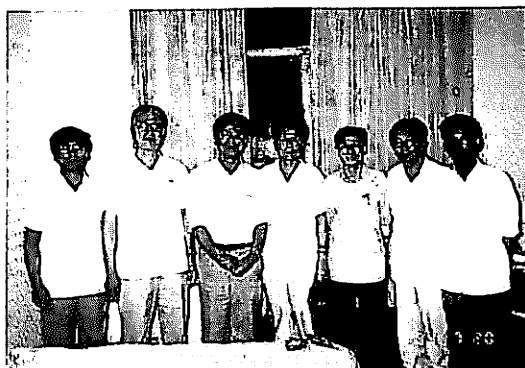


写真-10 成都地質学院の水文工程地質学部の主要メンバー  
左から竜学明講師(所属は普地研学部)、張院長、筆者、史之権教授(学院の科学研究所長)、趙澤三教授、王生生教授、王士天教授

## 正式交流のこと

山東海洋学院の海洋地質学科と、本研究センターとの間で、次頁(別掲)のような、今後の交流をうたったメッセージの交換をしたが、9月の本センター運営委員会の承認をいただいたことは周知の通りである。

## 中国内の旅行

地質旅行: 6月24日~28日にかけて、山東省泰山市地質局の郭振一氏の御案内で青島から曲阜まで、自動車で地質見学を行った。古生代のカンブリア紀~オルドビス紀(5.75~4.35億年前まで)のゆるやかに波うつような地層を横切って、ぼつ海湾の方から延々数千キロもつづく郟城断層ぞいにみられる白亜紀(1.41億~6500万年前まで)に陥没した盆地の地層を見学した。

また、7月10日に長沙市北東方、楊柳沖という地方のデボン紀(3.95~3.45億年前まで)の地層の上に発達した白亜紀の陥没盆地を見学した。

さらに、7月22日~25日にかけて、成都市南方、四川省の盆地の南西縁の我眉山(3098m)のふもとで、原生代(20~5.7億年前まで)の地層、中生代(2.3億年~6500万年前まで)の三疊紀~ジュラ紀、白亜紀の地層の重なり方の見学をした。この時代に四川盆地の形がきまったといわれているので、あえて見学を所望したのであった。



写真-11 災害研と山東海洋学院海洋地質学科との交流メッセージ交換式  
拍手しているのが王徳文教授、左側が張保主任教授

このほか、北京では、6月7日に周口店<sup>しゅうこうてん</sup>の北京原人の発掘場所の見学をし、青島では観光名所でもある労山の中生代の花崗岩を見学した。

観光：各研究所、大学での講演の合間、ないしは、終了後の骨休めということで、観光の機会が提供された。

北京では6月と7月の2回にわたり、万里長城、明の十三陵、故宮、天壇、香山公園、北海公園、颐和園（万寿山・昆明湖）、革命・歴史博物館、毛沢東記念館など、青島では、旧ドイツ人の別荘地、労山などの観光を行った。青島からの旅行最終日に曲阜で、孔子の墓所と廟を見学したがその巨大な遺跡におどろかされた。また同時に文化革命のものすごい傷跡にもおどろいた。

上海では、上海事変の発端となった黄浦江のガーデンブリッジ、中共第一回総会をひらいたという会議跡を開催記念日の7月1日のその日に訪問してみた。杭州は有名な西湖めぐりと、銭とう江のほとりに立つ六和塔の見学をし、巨大なよう隠寺や岳飛廟の見学をした。

### 地質科学合作についてのメッセージ

新潟大学積雪地域災害研究センター並びに山東海洋学院の共同願望に依り、互に共同協力的に学術の進歩・科学研究の発展等をねらうことを望み、双方の同意のもとに本協定を締結するものとする。ただし次の方式にしたがって相互に助け合い、利益し合い、交流を進めるものとする。

1. 相互の地質科学分野における教育研究の進歩を促進させ、科学の発展を計る為に、協定を締結する双方は、相手側に関係する資料（地質学科のカリキュラム・書籍・雑誌・研究論文並びにサンプル等を含む）を提供する義務がある。
2. 相互の人員交流の為、つねに互に教官・大学院生・学部生等の短期交換を計るものとする。それに応じて派遣側から派遣すべき対象者の略歴、その講議の原稿（若しくはそのあらまし）、当部局からの推薦書、並びに、派遣の理由書等を相手側に提出し、これを相手側の参考に供するものとする。
3. 今般の協議のおもむきにしたがって、双方の共通した関心のある課題に関して共同研究を進めるものとする。但し、共同研究すべき課題毎に、その都度打合せの上、別紙に具体的にのべるものとする。
4. 双方はともに一名ずつの連絡人を指定し、毎年、その年の学術交流プランについて打合せするものとする。

#### 協議調印者

日本国新潟大学  
積雪地域災害研究センター長  
教授 藤田至則

中華人民共和国  
山東海洋学院海洋地質学科  
主任教授 張保民

1984年6月23日



写真-12 山東省鄒城市北方，白堊紀後期の王氏組（層）の断層見学風景  
地層は陥没凹地内で生じたもの



写真-13 我眉山の山麓の谷底の三疊紀層をみる。切り出した石英質砂岩塊がみえる。向う側から史之権教授、張教授（地質主任）季永昭教授（チベット第四系の専門家）、竜学明講師

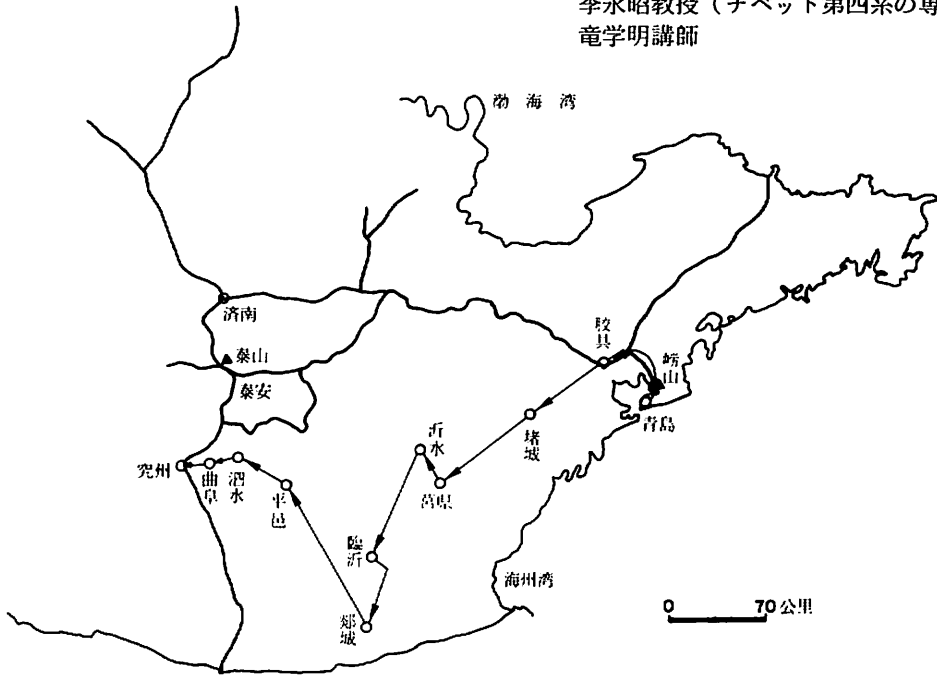


図-3 山東省自動車旅行コース

長沙には、その名の通り、しょう江の真中にあるオレンジ島という細く長い砂州がみられる。馬王堆のミイラを保管した博物館、毛沢東が教べんをとっていた第一師範などを見学した。

桂林は、南画で有名な、たけのこのような山容が珍らしく、巨大な鍾乳洞もあり、日本人の観光客も多い。圧観は、観光船で1日がかりの漓江下りであった。デボン紀の石灰岩が、多雨で湿暖な気候下で侵食されて独特の山容を呈したものらしい（写真-17）。

成都市では、詩人杜甫の草堂、三国史で有名な諸葛亮の祠、我眉山の報国寺、万年寺、樂山市の巨仏、蘇東波父子の祠などの見学も行った。

中国の大学（学院）は、従来、教育一本だったようで、研究は最近になって進められるようになったとのことである。また、現代化の1つの現われであろうが、大学、研究所の学長（院長）と所長は、例

外なく若い人にかえられつつあった。40～50代が中心で、ときとして60代前半の人もいるとのことであった。現代化の方針のためと思われるが、機器の更新、設置がいそがれているように見えた。

現代化による社会、生活の変化は、行く先ぎきのどこにも現れていた。住居の建てかえ—アパート化—はすさまじいという感じがした。衣食足りて住の充実をはかっているのであろうか。

外人の待遇はどこでも格別良いと思えた。昨今、日本の研究者の訪中が多くなっているらしいが、欧米のそれにくらべるとそれ程多くないとのことである。

研究者の生活は、我われのそれにくらべればかなりの改善を要するといった感じをうけたが、しかし、設備その他の建設計画が次つぎと進められている様子は、行革で夢も希望もなくなった日本の大学、研究所とはまるでちがった熱気がみられた。それは多分、社会主義の優位性というものかもしれない。

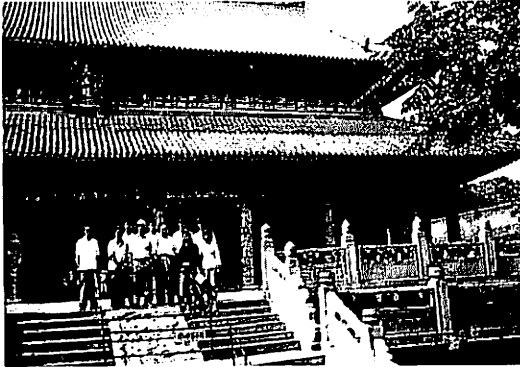


写真-14 孔子廟，大成殿前にて  
山東の地質巡検一同



写真-15 長沙市麓山にて  
左は、現在の中国科学院長沙  
大地構造研究所長の黄甦教授



写真-16 長沙市にある第一師範前  
にて  
第一師範は毛沢東氏が教べんをと  
ったところ  
右端：成都地質学院の竜漢春助教  
授，左端：同じく張廷光助教

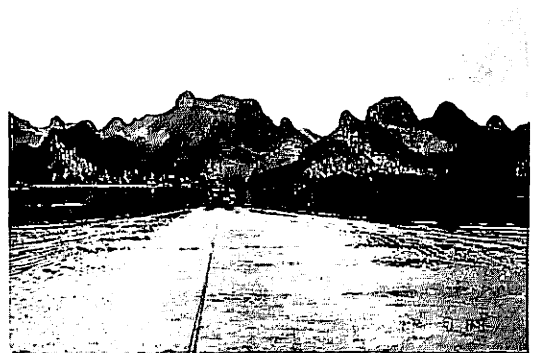


写真-17 漓江の遊覧船の引き舟  
石灰岩の浸食地形の独特な風景